

梶井基次郎

泥  
凜





泥

濘



## 一

それはある日の事だった。――

待っていた為替かわせが家から届いたので、それを金に替かえかたがた本郷へ出ることにした。

雪の降ったあとで郊外こうがいに住んでいる自分にはその雪解かまけが億劫おっくうなのであったが、金は待っていた金なので関かまわらずに出かけることにした。

それより前、自分はかなり根こんをつめて書いたものを失敗に終らしめていた。失敗はとにかくとして、その失敗の仕方の変に病的だったことがその後の生活にまでよくない影響えいきょうを与えていた。そんな訳で自分は何かに気持の転換てんかんを求めていた。金がなくなっていたので出歩いくにも出歩けなかった。そこへ家から送ってくれた為替にどうしたことか不備ふびなところがあつて、それを送り返し、自分自分はなおさら不愉快ふゆかいになつて、四日ほど待っていたのだつた。その日に着いた為替はその二度目の為替であつた。書書く方を放棄ほうきしてから一週間余りにもなつていただろ

うか。その間に自分の生活はまるで気力の抜けた平衡を失したものに変わっていた。先ほども云ったように失敗がすでにどこか病気染みたところを持っていた。書く気がぐらついて来たのがその最初で、そうこうするうちに頭に浮かぶことがそれを書きつけようとする瞬間に変に憶い出せなくなってきた。読み返しては訂正していたのが、それも出来なくなってしまった。どう直せばいいのか、書きはじめの気持そのものが自分にはどうにも思い出せなくなっていたのである。こんなことにかかりあってはよくないなど、薄うす自分は思いは

じめた。しかし自分は執念しゅうねん深くやめなかつた。また止まらなかつた。

やめた後の状態は果してわるかつた。自分はぼんやりしてしまっていた。その不活澆ふかつぱうな状態は平常経験するそれ以上にどこか変なところのある状態だった。花が枯かれて水が腐くさってしまったている花瓶かびんが不愉快で堪たまらなくなつていても始末するのが億劫で手の出ないときがある。見るたびに不愉快が増して行ってもその不愉快がどうしても始末しようという気持ちに転じて行かないときがある。それは億劫というよりもなにかに魅みせられている気持で



ある。自分は自分の不活澆のどこかにそんな匂いにおを嗅かいだ。

なにかをやりはじめてもその途中で極きまって自分はぼんやりしてしまった。気がついてやりかけの事に手は帰っても、一度ぼんやりしたところを覗のぞいて来た自分の気持は、もうそれに対して妙みょうに空ぞらしくなってしまった。いるのだった。何をやりはじめてもそういうふうちゅうとに中途半端はんぱが続くようになって来た。またそれが重たいせいなってくるにつれてひとりならでに生活の大勢が極きまったように中途半端はんぱを並ならべた。そんな風で、自分は動き出すことの

禁ぜられた沼ぬまのように淀よどんだところをどうしても出切つてしまうことが出来なかつた。そこへ沼の底から湧わいて来る沼気メタンのような奴やつがいる。いやな妄想もうそうがそれだ。肉親に不吉がありそうな、友達に裏切られているような妄想が不意に頭もたを擡もたげる。

ちようどその時分は火事の多い時節であつた。習慣で自分はよく近くの野原を散歩する。新らしい家の普請ふしんが到いたるところにあつた。自分はその辺りに転かつてゐる鉋屑かんなくずを見、そして自分があまり注意もせず煙草たばこの吸殻すいがらを捨てるのに気がつき、危いぞと思つた。そんなことが頭に

残っていたからであろう、近くに二度ほど火事があった、そのたびに漠ぼくとした、捕縛ほぼくされそうな不安に襲おそわれた。「この辺を散歩していたら」と云われ、「お前の捨てた煙草からだ」と云われたら、何とも抗弁こうべんする余地がないような気がした。また電報配達夫の走っているのを見るとは不愉快になった。妄想は自分を弱くみじめにした。愚ぐにもつかないことで本当に弱くみじめになってゆく。そう思うと堪らない気がした。

何をする気にもならない自分はよくぼんやり鏡や薔薇ばらの描えがいてある陶器とうきの水差しに見入っていた。心の休み場

所——とは感じないまでも何か心の休まっている瞬間をそこに見出すことがあった。以前自分はよく野原などでこんな気持を経験したことがある。それはごくほのかな気持ではあったが、風に吹ふかれてい草などを見つめているうちに、いつか自分の裡うちにもちようどその草の葉のように揺ゆれているもののあるのを感じる。それは定かなものではなかった。かすかな気配けはいではあったが、しかし不思議にも秋風に吹かれてさわさわ揺れている草自身の感覚というようなものを感じるのであった。酔よわされたような気持で、そのあとはいつとも心が清すがすがしいものに

変っていた。

鏡や水差しに対している自分は自然そんな経験を思い出した。あんな風に気持が転換出来るといいなど思っ  
て熱心になることもあった。しかしそんなことを思う思わ  
ないにかかわらず自分はよくそんなものに見入ってぼん  
やりしていた。冷い白い肌はだに一点、電燈でんとうの像を宿してい  
る可愛かわいい水差しは、なにをする気にもならない自分にと  
って実際変な魅力を持っていた。二時三時が打つても自  
分は寝ねなかつた。

夜晩おそく鏡を覗のぞくのは時によっては非常おそに怖ろしいもの

である。自分の顔がまるで知らない人の顔のように見え  
て来たり、眼めが疲つかれて来る故か、じーっと見ているうち  
に醜しゅうあく悪な伎楽ぎがくの腫はれ面めんという面そつくりに見えて来た  
りする。さーっと鏡の中の顔が消えて、あぶり出しのよ  
うにまた現われたりする。片方の眼だけが出て来てしば  
らくの間それに睨にらまれていることもある。しかし恐怖きょうふと  
いうようなものもある程度自分で出したり引込ひっこめたり出  
来る性質のものである。子供が浪打なみうちぎわ際で寄せたり退ひいた  
りしている浪に追いつ追われつしながら遊ぶように、自  
分は鏡のなかの伎楽の面を恐おそれながらもそれと遊びたい

興味に駆<sup>か</sup>られた。

自分の動かない気持は、しかしそのままであった。鏡を見たり水差しを見たりするときを感じる、変に不思議なところへ運ばれて来たような気持は、かえって淀<sup>よど</sup>んだ気持と悪く絡<sup>から</sup>まったようであった。そんなことがなくてさえ昼頃<sup>ひるごろ</sup>まで夢<sup>ゆめ</sup>をたくさん見ながら寝ている自分には、見た夢と現実とが時どき分明しなくなる悪く疲れた午後の日中があった。自分はいつか自分の経験している世界を怪<sup>あや</sup>しいと感じる瞬間を持つようになって行った。町を歩いていても自分の姿を見た人が「あんな奴が来た」と

云って逃げてゆくのではないかなど思つてびっくりする  
ときがあつた。顔を伏せている子守娘が今度こちらを向  
くときにはお化けのような顔になっているのじやないか  
など思うときがあつた。——しかし待っていた為替はと  
うとう来た。自分は雪の積つた道をひさしぶりで省線電  
車の方へ向つた。

## 二

お茶の水から本郷へ出るまでの間に人が三人まで雪で



迂<sup>すべ</sup>った。銀行へ着いた時分には自分もかなり不<sup>ふ</sup>機<sup>き</sup>嫌<sup>げん</sup>にな  
ってしまっていた。赤く焼けている瓦斯<sup>ガス</sup>煖<sup>だん</sup>炉<sup>ろ</sup>の上へ濡<sup>ぬ</sup>れ  
て重くなつた下<sup>げ</sup>駄<sup>た</sup>をやりながら自分は係りが名前を呼ぶ  
のを待っていた。自分の前に店の小<sup>こ</sup>僧<sup>ぞう</sup>さんが一人差向か  
いの位置にいた。下駄をひいてからしばらくして自分は  
何とはなしにその小僧さんが自分を見ているなど思っ  
た。雪と一<sup>いっ</sup>緒<sup>しょ</sup>に持ち込まれた泥<sup>どろ</sup>で汚<sup>よご</sup>れている床<sup>ゆか</sup>を見てい  
るこつちの目が妙にうるたえた。独<sup>ひとり</sup>り相<sup>さ</sup>撲<sup>も</sup>だと思<sup>おも</sup>いなが  
らも自分は仮<sup>か</sup>想<sup>そう</sup>した小僧さんの視線に縛<sup>しば</sup>られたようにな  
った。自分はそんなときよく顔の赧<sup>あか</sup>くなる自分の癖<sup>くせ</sup>を思

い出した。もう少し赧はにかくなっているんじゃないか。思う尻しりから自分は顔が熱あつくなつて来たのを感じた。

係りは自分の名前をなかなか呼ばなかった。少しぐず過ぎた。小切手を渡わたした係りの前へ二度ばかりも示威運じい動どうをしに行つた。とうとうしまいに自分は係りに口を利いた。小切手は中途の係りがぼんやりしていたのだつた。

出て正門前の方へゆく。多分行き倒れか転んで氣絶きけつをしたかした若い女の人を二人の巡査じゆんさが左右から腕うでを抱かかえて連れてゆく。往来の人が立留たちどつて見ていた。自分はその足で散髪屋さんぱつやへ入つた。散髪屋は釜かまを壊こわしていた。自分

が洗つてくれと云ったので石鹼せっけんで洗つておきながら濡ぬれた手拭てぬぐいで拭ふくだけのことしかしない。これが新式なのでもあるまいと思つたが、口が妙に重くて云わないでいた。しかし石鹼の残っている気持悪さを思うと堪らない氣になつた。訊たずねてみると釜を壊したのだという。そして濡れたタオルを繰くり返かえした。金を払はらつて帽子ぼうしをうけとるとき触さわつてみるとやはり石鹼が残っている。何とか云つてやらないと馬鹿ばかに思われるような氣がしたが止めて外へ出る。せっかく氣持よくなりかけていたものと思うと妙に腹が立つた。友人の下宿へ行つて石鹼は洗いおとし

た。それからしばらく雑談した。

自分は話をしていているうちに友人の顔が変に遠とおどおしく感ぜられて来た。また自分の話が自分の思う甲かんどころ所をちつとも云っていないように思えてきた。相手が何かいつもの友人ではないような気にもなる。相手は自分の少し変なことを感じているに違いないとも思う。不親切ではないがそのことを云うのが彼自身怖ろしいので云えずにいるのじやないかなど思う。しかし、自分はどこか変じやないか？などこちから聞けない気がした。「そう言えば変だ」など云われる怖ろしさよりも、変じやないか

と自分から云ってしまえば自分で自分の変な所を承認したことになる。承認してしまえばなににもかもおしまいだ。そんな怖ろしさがあつたのだつた。そんなことを思いながらしかし自分の口は喋しゃべっているのだつた。

「引込んでいるのがいけないんだよ。もつと出て来るようにしたらいいんだ」玄関げんかんまで送って来た友人はそんなことを云つた。自分はなにかそれについても云いたいよ  
うな気がしたがうなずいたままで外へ出た。苦役を果した後のような気持であつた。

町にはまだ雪がちらついていた。古本屋を歩く。買い

たいものがあっても金に不自由していた自分は妙に吝りん嗇しよくになつていて買い切れなかった。「これを買うくらいなら先刻さつきのを買う」次の本屋へ行っては先刻の本屋で買わなかったことを後悔こうかいした。そんなことを繰り返しているうちに自分はかなり参つて来た。郵便局で葉書を買つて、家へ金の札と友達へ無沙汰ぶさたの詫わびを書く。机の前ではどうしても書けなかったのが割合すらすら書けた。

古本屋と思つて入った本屋は新らしい本ばかりの店であつた。店に誰もだれいなかったのが自分の足音おくで一人奥から出て来た。仕方なしに一番安い文芸雑誌を買う。なに

か買つて帰らないと今夜が堪らないと思う。その堪らなさが妙に誇大こだいされて感じられる。誇大だとは思つても、そう思つて抜けられる気持ではなかつた。先刻の古本屋へまた逆に歩いて行つた。やはり買えなかつた。吝嗇けちくさ臭いぞと思つてみてもどうしても買えなかつた。雪がせわしく降り出したので出張でばりを片付けている最後の本屋へ、先刻値を聞いて止よした古雑誌を今度はどうしても買おうと決心して自分が入つて行つた。とつっきの店のそれもとつつきに値を聞いた古雑誌、それが結局は最後の選択せんたくになつたかと思うと馬鹿気た氣になつた。よその小

僧が雪を投げつけに来るのでその店の小僧はその方へ氣をとられていた。覚えておいたはずの場所にそれが見つからないので、まさか店を間違えたのでもなかろうがと思つて不安になつてその小僧にきいてみた。

「お忘れ物ですか。そんなものはありませんでしたよ」云いながら小僧はよそのをやつつけに行こう行こうとしてうわの空になつてゐる。しかしそれはどうしても見つからなかつた。さすがの自分も参つていた。足袋たびを一足買つてお茶の水へ急いだ。もう夜になつていた。

お茶の水では定期を買つた。これから毎日学校へ出る



として一日往復幾何いくらになるか電車のなかで暗算をする。何度やってもしくじった。その度たびに買うのと同じという答えが出たりする。有楽町で途中下車して銀座へ出、茶や砂糖さとう、パン、牛酪バターなどを買った。人通りが少い。ここでも三四人の店員が雪投げをしていた。堅かたそうで痛そうであった。自分は変に不愉快しゅくじに思った。疲れ切ってもいた。一つには今日の失敗しゅくじり方が余りひど過ぎたので、自分は反抗的にもなってしまうていた。八銭のパン一つ買って十銭で釣銭つりせんを取ったりなどしてしきりになにかに反抗の気を見せつけていた。聞いたものがなかったりする

ると妙に殺氣立った。

ライオンへ入って食事をする。身体を温めて麦酒ビールを飲んだ。混合酒カクテルを作っているのを見ている。種々な酒を一つの器へ入れて蓋ふたをして振ふっている。はじめは振ふっていないがしまいには器に振ふられているような恰好かっこうをする。コップ洋盃コップへついで果物くだものをあしらい盆ぼんにのせる。その正確な敏びんしょう捷しやうさは見ていて面白かった。

「お前達は並んでアラビア兵のようだ」

「そや、バグダツドの祭のようだ」

「腹が第一減っていたんだな」

ずらっと並んだ洋酒の壇びんを見ながら自分は少し麦酒ビールの酔よいを覚えていた。

## 三

ライオンを出てからは唐物屋とうぶつやで石鹼を買った。ちぐはぐな気持はまたいつの間にか自分に帰っていた。石鹼を買ってしまったって自分は、なにか今のは変だと思いはじめた。はっきりした買いたさを自分が感じていたのかどうか、自分にはどうも思い出せなかった。宙を踏ふんでいる

ようにたよりない気持であつた。

「ゆめうつつで遣やつてるからじゃ」

過失などをしたとき母からよくそう云われた。その言葉が思いがけず自分の今したことのなかにあると思つた。石鱚いしかは自分にとって途方もなく高価たかい石鱚であつた。自分は母のことを思つた。

「奎吉けいきち……奎吉！」自分は自分の名を呼んでみた。悲しい顔かおつき附をした母の顔が自分の脳裡のうりにはつきり映つた。

——三年ほど前自分はある夜酒に酔つて家へ歸つたことがあつた。自分はまるで前後のわきまえをなくしてい

た。友達が連れて帰ってくれたのだったが、その友達の話によると随分非道ずいぶんひどかったということ、自分はその時の母の気持を思ってみるたびいつも黯然あんぜんとなった。友達はあとでその時母が自分を叱しかった言葉だと云って母の調子を真似まねてその言葉を自分にきかせた。それは母の声そっくりと云いたいほど上手に模もしてあった。単なる言葉だけでも充じゅうぶん分ぶん自分は参まっているところであつた。友人の再現してみせたその調子は自分を泣かすだけの力を持つていた。

模倣もほうというものはおかしいものである。友人の模倣を

今度は自分が模倣した。自分に最も近い人の口調はかえってよそから教えられた。自分はその後に続く言葉を云わないでもただ奎吉と云っただけでその時の母の気持を生いきと蘇よみがえらすことが出来るようになった。どんな手段によるよりも「奎吉！」と一度声に出すことは最も直接であった。眼の前へ浮んで来る母の顔に自分は責められ励はげまされた。――

空は晴れて月が出ていた。尾張町おわりちようから有楽町へゆく鋪ほ道どうの上で自分は「奎吉！」を繰り返した。

自分はぞーっとした。「奎吉」という声に呼び出され

て来る母の顔附がいつか異ちがうものに代っていた。不吉を  
 司つかさどる者——そういったものが自分に呼びかけているの  
 であつた。聞きたくない声を聞いた。……

有楽町から自分の駅まではかなりの時間がかかる。駅  
 を下りてからも十分の余はかかった。夜の更ふけた切り通  
 し坂を自分はまるで疲れ切つて歩いていった。袴はかまの捌さばけ  
 る音が変に耳についた。坂の中途に反射鏡のついた照明  
 燈が道を照している。それを背にうけて自分の影かげがくつ  
 きり長く地を這はっていた。マントの下に買物の包みを抱  
 えて少し膨ふくれた自分の影を両側の街燈が次には交互こうごにそ

れを映し出した。後ろから起って来て前へ廻り、まわ伸びて行って家の戸へ頭がひよっくりもたぐ擡つたりする。慌あわただしい影の変化を追っているうちに自分の眼はそのなかでもちつとも変化しない影を一つ見つけた。ごく丈のたけ詰った影で、街燈が間遠になると鮮あざやかさを増し、片方が幅を利かし出すとひそまってしまふ。「月の影だな」と自分は思った。見上げると十六日十七日と思える月が真上を少し外れたところにかかっていた。自分は何ということなしにその影だけが親しいものに思えた。

大きな通りを外れて街燈の疎まばらな路へ出る。月光は始



めてその深祕<sup>しんぴ</sup>さで雪の積った風景を照<sup>あ</sup>っていた。美しかった。自分は自分の気持がかなりまとまっていたのを知り、それ以上まとまってゆくを感じた。自分の影は左側から右側に移しただけでやはり自分の前<sup>まへ</sup>にあった。そして今は乱されず、鮮かであった。先刻自分に起<sup>お</sup>ったこと<sup>こと</sup>なく親しい気持を「どうしてなんだろう」と怪<sup>あや</sup>しみ慕<sup>なつか</sup>しみながら自分は歩いていった。型のくずれた中折<sup>なかおれ</sup>を冠<sup>かぶ</sup>り少しひよわな感じのする頸<sup>くび</sup>から少し厳<sup>いか</sup>った肩<sup>かた</sup>のあたり、自分は見ているうちにだんだんこちらの自分を失<sup>う</sup>て行<sup>い</sup>った。

影の中に生き物らしい気配があらわれて来た。何を思っているのか確かに何かを思っている——影だと思っていたものは、それは、生なまなましい自分であつた！

自分が歩いてゆく！　そしてこちらの自分は月のような位置からその自分を眺めている。地面はなにか玻璃はりを張つたような透明とうめいで、自分は軽い眩暈めまいを感じる。

「あれはどこへ歩いてゆくのだらう」と漠ぼくとした不安が自分に起りはじめた。……

路に沿うた竹藪たけやぶの前の小溝こみぞへは銭湯で落す湯が流れて

来ている。湯気が屏風びょうぶのように立騰たちっのぼっていて匂においが鼻を  
撲うった——自分自分はしみじみした自分自分に帰かえっていた。  
風呂屋ふろやの隣となりの天ぷら屋てんぷらやはまだ起きていた。自分自分は自分自分  
の下宿げしゆくの方かたへ暗い路みちを入いって行いった。

（大正十四年六月）



日本文学電子図書館

---

「梶井基次郎 ちくま日本文学028」

著 者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2008年11月10日 第1刷

---



日本文学電子図書館